

## 葉集を読む

松岡 隆子

冬滝のしぶきを浴びて空手の子

西島 美晴

空手道場の子供たちの寒稽古であろうか。吐く息も凍るような寒さの中、滝しぶきを浴びながらの特訓に真剣に励む子供たちの姿は眩しい。空手は体を鍛えるだけでなく心をも鍛える武道である。心身を鍛え自分自身を高める。武道も芸事も、そして文芸も同じである。寒稽古に励む子供たちの氣迫にわが身を顧みる思いである。

冬菊のまばゆき白の崩れそむ

宮当 信行

〈まばゆき白〉が良い。冬晴の空から降りそそぐ日差しに冬菊の白さがひときわ際立つ。そのまばゆい白さがいままさに崩れようとしている。その一瞬をすかさず句に詠んだ。それは冬菊と対峙して得た一瞬であった。芭蕉のいう「物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし」の世界である。

作者は昨年の12月号で巻頭を得て以来、何かを会得された気がする。まだ60代の作者の今後の活躍に期待が膨らむ。いつか句会でお目にかかる機会があることを願っている。

表紙にほへる読初の新刊書

見上 恵

〈表紙にほへる〉に、読初の新刊書を手にしたときのわくわく感が伝わってくる。掲句からはどんな内容の本かは知る由もないが、読初に相応しい新刊書であるに違いない。待望の新刊書の頁を繰るときの清々しさは、新年ならでの感慨と  
思う。

成木責塞ぎの虫を振り払ひ

矢作 裕子

「成木責」は小正月の行事で、「その年の果樹、特に柿の木に、その年の豊穰を約束させる木呪」と歳時記にある。果樹を鉦や鎌などで傷つけ、「なるか、ならぬか、ならねば伐るぞ」と威嚇すると、もう一人が「なりません、なりません」と答えるのである。矢作さんの家には夫君が遺された柿畑がある。嘗ては夫と二人で問答していた「成木責」のことを思うとき〈塞ぎの虫〉が出てきたのだろう。実感に基づいて詠まれた「成木責」の連作は新鮮である。

浮寝鳥つかず離れず暮れゆる

小泉 恵子

小春の波間に揺れながら眠っている水鳥の姿は平和である。そのつかず離れずの距離感ほ心地よい。日が西に傾き夕日が波間に漂う頃になっても、水鳥たちは態勢を崩すことも

なく眠りながら暮れてゆく。静かな冬の景である。

「浮寝鳥」は『万葉集』以来多くの歌人に詠み継がれてきた伝統的な季語である。慌ただしい現代にあつて雅の一端を感じさせてくれる季語であり大切に詠み継いでいきたい。

雪積むや地震に崩れし能登瓦

梅澤 惇子

能登半島を旅行した人は、黒光りする能登瓦の屋根の美しさを言う人が多い。葉誌上でもその美しさを詠んだ句を見た覚えがある。その能登瓦の屋根は元日の大地震で無残にも瓦礫と化した。被災地では今なお避難所生活を余儀なくされている方が多い。崩れた能登瓦に降り積もる雪の映像に、誰もが一日も早い復興を願っている。事実を詠んで深い祈りの一句となった。

うたた寝の部屋の奥まで冬日かな

鈴木美代子

冬至を過ぎると日一日と日照時間が長くなる。いわゆる日脚が伸びて来るのである。ひと通り家事を終えた鈴木さんは、ソファーに座り新聞を読みはじめ。部屋の奥まで差し込む日差しが心地よくてうつらうつらと眠気がさしてくる。春めいた日差しに包まれてしばしの転寝を楽しんだことが銜もなく詠まれていて好感が持てる。

鬼の子の夕べの風に震へをり

早出 誠治

「鬼の子」とは「糞虫」のことである。『枕草子』の「みのみし、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、……」から来

たものと言う。秋風が吹けば親恋しさに「ちちよ、ちちよ」と鳴くと言われる。掲句はそういうことを踏まえて詠まれた句であり、冷たい夕風に震えながら鳴く糞虫の声が聞こえてくるようだ。「鬼の子」ならではの鳴き声である。

冬の鴟十年日記はもう買はず

堀 すみ江

二月号に〈迷ひては五年日記といふを買ひ〉という小川テル子さんの句があったが、ある年齢になると五年日記や十年日記が重荷になってくるようだ。だが何も五年日記や十年日記に拘ることはなからう。書店や文具屋にはいろいろなデザインの日記が並んでいる。自分に合った素敵な日記帳が見つかるはずだ。日記をつけながら静かに齢に添って暮らしていくことは素敵なことだと思う。堀さんもきつと同じ思いだろう。〈冬の鴟〉が堀さんの気持ちを代弁している。

その他の印象句

薄ごほり仏足石の小指にも  
静けしや時雨にひかる石畳  
暝れば眼冷たくありにけり  
母送り何もなきごと年流る  
七草を全部は言へず粥啜る  
生ひたちを子等に話してお正月

小田 幸子  
山下なつ子  
沢辺 泰秀  
朱 桂子  
浅尾 泰昭  
野尻 敏子